NINEPIECE

ハルアas稗田阿求

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

守矢の巫女が幻想郷に引っ越してきた時、彼女は未だ外の世界で忘れられていない『漫画』という文化を幻想郷に持ち込んできた。

この物語は、その中の一つである麦わら帽子の海賊の御話が所以で幕を開けた、妖精たちと、天邪鬼による

航海の物語である。

週一投稿予定！開始から完結まで三か月程と見込んでます。

元ネタ作品一覧

東方ｐｒｏｊｅｃｔ、ｏｎｅｐｉｅｃｅ、ゲーマーズ‼、妖怪ウォッチ、ノラガミ

目次

一話　1
二話　10

一話

この物語は、天狗のインタビューをもとに、稗田阿求が記している。

富、名声、力、この世の全てを手に入れた男・海賊王ゴール○・ロジャー。彼の死に際に放った一言は、全世界を海へと駆り立てた。

「俺の財宝か。欲しけりゃくれてやる。探せ！　この世の全てをそこに置いてきた」

男達はロマンを追い求める。

世はまさに、大海賊時代!!

湖を面した陸地で、麦わら帽子を被った若者が、臨戦態勢をとる。その視線の先には、不自然な暗闇が存在する。

「ゼハハハハ。これで終わりだ。麦わら!!」

暗闇の中から叫び声がするのと同時に、その闇の中から、木の板や鉄屑など、何かの残骸が無数に放たれ、麦わら帽子の若者を襲う。若者は、残骸に一回も当たらずに避けきると、闇に向かって駆け出す。

「喰らえ～！　ギア3、武装色硬化」

若者が叫ぶと、その右腕は巨人のそれと思えるほど巨大化する。それは同時に、生物

の体の部位とは思えないほどの光沢を纏っていた。
「ゴムゴ○の象銃!!」
若者がその巨大な右腕を突きだして闇を切り裂き、その中心にいる敵の本体へと差し迫る。そして、若者の巨大な腕と闇の本体が衝突したその刹那。
若者の腕はバラバラに砕け、闇の本体はそのまま数メートル吹き飛ばされた。その結果を受けて、
「よしゃ――！　勝った――ー。あたい、サイキョ――!!!」
「うわ――また負けたのだー」
氷を纏った腕で見事闇の妖怪を倒した、麦わら帽子を被った妖精・チルノは、勝利宣言の後、自らの代名詞とも言える発言をする。それを見て、闇の本体・ルーミアは自らの敗北を自覚し、悔しがる。
「えっと……二人とも何やっているの？」
友人達のはしゃぐ様子を見て、わたし、大妖精が戸惑った顔で二人に質問したのは、その直後でした。
「ワ○ピースって、最近妖怪の山に引っ越してきた神社の巫女さんが持っていた本だよね？　それの真似をしていて遊んでいたのね」
友達同士の謎の決闘シーンが何故起きたのか説明されて、わたしは簡単にその内容を

まとめる。

最近、外の世界から引っ越してきた奇跡の巫女・東風谷早苗が持ち込んできた漫画と呼ばれる本。チルノちゃんとルーミアちゃんは、その中の一つ・『○ｎｅＰｉｅｃｅ』という作品にはまって、それ風の弾幕ごっこで遊んでいたようだ。

「それでも危険なのはダメ！　ルーミアちゃんは無闇に闇の中から弾幕以外の物理的な物を投げない！　チルノちゃんは直接攻撃しない！　弾幕ごっこはあくまで美しさを競うものだから危ないことはしないの、わかった？」

板を投げたり、腕に氷を纏って直接殴ったりといった行為は危険すぎる。

わたしはそんな二人の行いを友達として見過ごせず、完全に説教モードで言葉を並べるが、

「……あたいの氷より、咲夜のナイフの方が危ないし」

「他所は他所！　内は内！」

ムスっとしているチルノちゃんと、その言葉をズッバっと切り裂くわたしの姿は、端から見たら友人のそれというより母子のそれに見えるのだ……

「まぁ、確かにさっきの弾幕ごっこはやり過ぎだったけど、何か○ンピースっぽいことしたいのかー」

わたしの説教モードを終わらせるためか、ルーミアちゃんが無理矢理に話題を切り替

えようとする。その意図を察したのか、もしくは話題に興味を持ったのかチルノちゃんがそれに続いて口を開く。

「そうだよな。あたいの麦わら帽子もそうだけど、やっぱりワン○ースっぽいことしたいよな。だったら……」

わたしも、危険でなければワンピー○の真似事を咎めるつもりはない。それっぽいことは何か考えつつ、私はチルノちゃんとルーミアちゃんの言葉に耳をすます。

『海に行きたい（のだー）』

（二人が同時に話した時の表記がゲーマーズ○式!!）

チルノとルーミアが同時に願望を叫ぶと、わたしは若干メタい視点で驚く。その驚きが、二人が叫んだことの意味に気付くのを遅らせる。海は無理だ。行ける訳がない。

「やっぱりワンピ○スと言えば海だよな。分かってんじゃんルーミア！」

「そーなのだー」

「あのっ、チルノちゃん、ルーミアちゃん……」

「よーし、決めたぞ大ちゃん！　あたい、海賊王になる」

「そーなのかー」

わたしが申し訳なさそうに、海へ行くことの問題点を指摘しようとするが、テンションが上がってるチルノちゃんとルーミアちゃんにはその言葉は届かない。そうしてる

間にどんどん話が先に進んでしまい、
「海賊王っいうのは、海で一番自由なやつなんだ。サイキョーのあたいにぴったりの称号だよな」
「そーなのかー?」
「ルーミアちゃんはさっきから『そーなのかー』としか言ってないけどどうかしたの?ってそれどころじゃなかった、チルノちゃん海は」
「よーし、じゃあ海に行って海賊やろう。あたいが船長で、大ちゃんが航海士、ルーミアは……えーっと黒ひげ!」
(あっ、この二人、私の話を聞く気が無いわね。これは私に話が振られるまで黙っているしかないかな〜)
海やら○ンピースやらの話で盛り上がり過ぎて、わたしが二人の話に水を差す余裕はない。あまり気が進まないが、あの事を伝えるのは、わたしに話が振られてからにしよう。
わたしはそう決意して、二人のハイテンションな会話を微笑ましく見つめ、その時を待つ。それから数分後、ついにチルノちゃんとルーミアちゃんがわたしに決定的な問いを投げかける。
『大ちゃん(大妖精)、海ってどこにあるんだ?(のかー?)』

それは、先ほどからわたしが言おうとしていたことを答えとする質問。だから満面の笑みと共に、きっぱりと、そして、この上なく残酷に答える。

「チルノちゃん、ルーミアちゃん、幻想郷に海はないよ。ここ、外の世界の内陸部にあるから」

「えっ……」

「そ……なの……かー？」

場の空気が暗くなり、寒気が三人の体を包む。ルーミアちゃんが闇を放出し、チルノちゃんが冷気を放出しているので比喩としての意味というよりは物理的に。二人の顔を見てみると、ワ○ピースで例えるならネガティブの幽霊にでも体を通り抜けられたような表情になっていた。

（うん、わかってたよ。散々お出掛けの話で盛り上がってる所に『行けない』って言われたら、そういう反応になりますよね～）

前に一度、ここにいるメンバーとリグル、みすちーと遠足に行こうとして、雨で中止になった際に二人は同じような顔をしてたのを思い出す。

納得はしてもらえないだろうが一応補足説明をする。

「海に行くとしたら、紫さんに頼んで外の世界に行くか、もしくはもっと難しいけど、宇宙にある月の裏側にあるっていう月の都に行くしかないね」

もちろん、『海に遊びたい』なんて個人的な理由で妖怪の賢者が結界を操作してくれる訳がないし、月の都なんてそれ以上に遠い場所だ。幻想郷の外にすら出ることの出来ないわたしたちが、日本どころか地球の外にある月に行くなんて絶対に無理な話だ。

「残念だけど、海に行くのは諦めた方がいいよ。ほら幻想郷にも似たような広い水場はあるよ、この霧の湖とか、玄武の沢とか」

少しでもチルノちゃんとルーミアちゃんの機嫌を良くするために遊ぶ場所の代案を並べるが、一度悪くなった機嫌を取り戻すのは難しい。

「あ～、誰か月に行く計画立ててくれないかな～。そしたら、こっそりと紛れ込んで一緒に月に行けるんだけどな。大ちゃん」

何回か説得を繰り返し、やっとチルノちゃんは明るくわたしに笑いかけてきた。ルーミアちゃんの方はぶつぶつと何かを言いながら海へ向かう方法を考えている。思考に集中しているせいか、ルーミアちゃんの闇はより一層に濃くなるが、二人の表情はいつも皆で遊んでいる時のそれに戻っていた。

「まぁ取り敢えず、海のことは忘れてこの湖で遊ぼうよ！」

さらに言葉を重ねて、チルノちゃんの頭から海に関する思考を追い出す。チルノちゃんの頭の容量では、三分も話していれば別のことで頭がいっぱいになるだろう。

こうして、チルノちゃんの頭から海に関する事項は取り敢えず消えた。

しかし、ここで完全にチルノちゃんから海への興味をなくせなかったことで、わたしたちはとんでもない事件に巻き込まれることになるのだが、この時のわたしは、知る由もないのである。

同時刻、霧の湖の対岸・紅魔館では、元気にはしゃぐチルノたちを紅魔館の主・レミリア・スカーレットと、そのメイドの十六夜咲夜が見つめていた。

「元気ねー。妖精達は。あんなに外で遊んで、日焼けとかしないのかしら?」

「チルノにとって、日焼けは致命傷になるのでは」

お互いに水を駆け合う妖精二人に妖怪一人。その様子を見て、レミリアがそっとため息を吐き、咲夜がそれに答える。大妖精はともかく、闇の妖精であるルーミアと氷の妖精であるチルノには日焼けは重大な問題だろう。ルーミアは闇に囲まれているからそうはならないだろうが、チルノにはそれがない。

「多分、チルノは日焼けする前に溶けるわよね。チルノの日焼けなんて、背中から扉が現れるなんて奇跡ほどあり得ないことよ」

レミリアがそう呟くと、後ろから誰かの声が聴こえてくる。

「レミィ、あれが完成したわよ」

ヴワル大図書館の司書であるパチュリー・ノーレッジだ。どうやら、レミリアが彼女

に頼んでいた物が完成したらしい。

「月へ向かうためのロケット、ついに完成したのね。咲夜、すぐに霊夢へ連絡して」

とレミリアが言った時には、隣にいたはずの咲夜は霊夢への報告のため姿を消していた。レミリアは、咲夜の仕事の早さに改めて驚きつつ、後ろにいる友人の方を向く。

「くくっ、ここから始まるのね。私たちの月侵略が」

数日後、吸血鬼が月侵略にのり出したという情報が、幻想郷中に広まった。

二話

この物語は、天狗のインタビューをもとに、稗田阿求が記したものである。

「これで、あの吸血鬼たちは迷わずに月へ行けるでしょう」

紅魔館の一室、月人と月の兎が吸血鬼のロケットに細工をしている。どうやら、『月の羽衣』という月へ向かうために用いる道具の切れ端を使って、吸血鬼を月まで導くつもりらしい。

物陰からその様子を盗み見ていた私は、そっとロケットの方を見る。ロケットの屋根の部分が一部だけ色が変わっている。あれが『月の羽衣』なのだろう。

「行くわよ。鈴仙」

「はい。お師匠さま」

月人たちの声が聞こえる。私は今まで以上に息を殺し、月人が部屋をでるのを待つ。

ギィィィィ、バタン

ドアが開いて閉まる。ドア越しに聞こえる足音がどんどん小さくなっていく。

完全に足音が消えたのを確認し、私は無音で立ち上がり、ロケットに近づく。このタイミングで吸血鬼や博麗の巫女が部屋に入ってきたら大変だ。私のような下級の妖怪

が侵入しているのを見られたら、絶対に退治される。
極度の緊張感の中、ついにロケットの屋根に触れられる所まで来た。そして、屋根そのものには目のくれず、そこについている一切れの布・『月の羽衣』を手に取る。
これ一つでも、無茶をして紅魔館に忍び込んだ甲斐はあるだろう。だがそれで終わらないのが私だ。
吸血鬼が月に行けば、当然、月の奴等はその対応に追われる。その間にこっそりと月の都の武器をくすねることが出切れば、私は、その目的に大きく近づくことが可能だ。
そう思って口角を上げると、手に持つ『月の羽衣』を真っ二つに裂き、一方を再び屋根に張り付け、もう一方を私のポケットに入れる。
その時である。
「船はどこだ――！」
「どこなのかー」
「ちょっ、チルノちゃん、ルーミアちゃん。これ大丈夫？　怒られない？」
妖精が二人と妖怪が一人、ロケット部屋の中に入ってきた。何回か見た顔だが、何故かその内の一人・最初に叫んだ水色の妖精は麦わら帽子を着用している。他の二人は、妖精にしてはかなり大きい緑色の妖精と金髪の片側に赤いリボンを付けた黒い服の妖怪だ。

「ん？　誰だお前。紅魔館の住人じゃないよな」
麦わら帽子の妖精がこちらを向いて質問する。この妖精たちは、この館の関係者か？
だとすればこの状況は非常にまずい。例えここでこいつらを倒したとしても、そのバックにいる吸血鬼には、絶対に勝てない。
「くっっ、わ……私は……」
私が返答に困っていると、代わりに麦わら帽子の妖精が目を輝かせながら口を開く。
「もしかして、お前も海に行くためにロケットに忍び込もうとしてる奴か」
どうやらこの妖精たちも紅魔館に侵入してきたらしい。海というのはおそらく、月の海のことを指しているのだろう。麦わら帽子に海、いかにも子供が好きそうな物だが、わざわざ月に行ったり、吸血鬼に関わったりするような物ではない。私は、相手の目的を確認するために妖精たちに話しかける。
「ああ、お前たちもか？」
すると、麦わらの妖精の隣にいる緑の妖精と、黒い服を着た妖怪が答える。
「えっと、わたしたち、ワン〇ースっていう本にはまってまして、みんなで海に行きたいなという話になり、レミリアさんたちの月旅行に忍び込もうって決めたんです」
「そーなのだー」
いや、黒い妖怪の方は何も答えていない。緑の妖精に相槌をうっただけだ。私は、頭

の中から『ワンピース』という単語をひねり出す。

たしか、トップとボトムが一繋ぎになった女性用の衣服だよな。って、それに嵌って月に行く訳はない。少なくとも海という概念に関係する『ワンピース』だろう。もしかしたら麦わら帽子も関係しているかもしれない。

海、麦わら帽子……思い出した。最近、妖怪の山に引っ越してきた神社の巫女が外の世界の文化とか言って見せていた本の中に、『ＯｎｅＰｉｅｃｅ』とかいう題名の本を見た記憶がある。私が長い間あの神社にいたら退治されてしまうから序盤しか読むことが出来なかったが、私のイメージと同じようなスタンスのキャラクターが登場するところは読むことができた。

そこまで思い至ると、緑色の妖精が自分たちの自己紹介をしてくる。

「わたしは大妖精です。こっちの金髪にリボンの妖怪がルーミア。それにこっちの麦わら帽子の可愛い妖精が……」

「あたいはチルノ。海賊王になる妖精だ！」

大妖精が麦わらの妖精の語ろうとした刹那、その言葉を遮ってチルノは自らの名を名乗り、高らかに宣言する。どうやら、『ワンピース』とは、あの海賊が出てくる本のことで間違いないようだ。

「……あっ、そうだ。あなたはどなたですか？」

チルノの介入に大妖精は言葉を失っていたが、少ししてから私が何者か尋ねてくる。
この妖精たちの目的に興味はないが、月の住民たちを混乱させる人員は多い方がいい。それに、ここで騒ぎをおこして吸血鬼たちに見つかることも避けたい。
だから、目的だけを偽って、私は自らの名を語る。
「私は鬼人正邪。ここには、偉大なる海の戦士になりにきた！」

紅魔館からロケットが出発した。わたし、大妖精を含め、チルノちゃん、ルーミアちゃん、それに鬼人正邪さんの四人は、無事にロケットの荷物の中に忍び込んで月へ出発し、そして、
無事に宇宙空間へ放り出されました。
うん、分かってるよ。何が『無事に』なのか意味不明だよね。わたしもそう思うよ。でもねでもね、正邪さんも含めわたし達にはロケットに関する知識がさっぱりないんだよ。
だから、ロケットの最下層が切り離された時に反応することが出来ませんでした。その結果がこれです。空気の入れ替えが出来なくて息苦しいです。外には星しか見えません。しかもパチュリーさんの魔法が切れたのか、重力も滅茶苦茶です。
チルノちゃんは、「空島は動きずれー」とか言ってはしゃいでいる。ルーミアちゃんは

完全に外の風景と同化していて、どこにいるか分からない。正邪さんは重力が出鱈目なせいで屋根に足を付けている。

「で、正邪さんはなんでそんなに落ち着いてるんですか?」

チルノちゃんの頭では状況が分かっていないだろう。ルーミアちゃんは闇に包まれているためどんな様子でいるのか見えない。それはルーミアちゃん自身も同じだろうから、もしかしたらこの状況が分かっていないのかもしれない。だからこの二人が平然としているのはまだ分かる。だけど正邪さんまで平然としているのは納得がいかない。この環境下で慌ててるのがわたしだけって、この集まりって本当に大丈夫かな?

そう思って、わたしは正邪さんに声をかける。すると、正邪さんは口角を上げて(正邪さんは上下が逆さまなので正確には口角を下げて)わたしの質問に答える。

「私たちが吸血鬼のロケットから切り離された時、私たちはまだ宇宙についてなかったんだ。それが今はきっちりと宇宙空間の中だ。つまり、着実に月へ向かっているって訳だ」

いやっ、その理論はおかしい。あっ、でもどうして重力を無視してこのロケットは宇宙空間にまで来られたんだろう?

「(まぁ、私が『月の羽衣』を持っているから、絶対に月に行けるんだが、……)」

「ん? どうしたんですか。そんな『〇ーマーズ!!』みたいな表記で呟いて」

「メタいぞ！　お前。ってか、お前も『うん、分かってるよ』から始まる状況語りも結構『ゲー〇ーズ‼』っぽいと思うぞ」

　正邪さんがこっそりと呟くと、わたしは正邪さんの言葉と作者の表記の仕方への疑問を抱く。表記の仕方の方を口にすると、正邪さんは何処かで見たことがあるようなハイテンションなリアクションをとる。

　わたしは、そんな正邪さんのリアクションをスルーして、先ほど抱いたもう一つの疑問を口にする。

「で、『月の羽衣』って何ですか？」

「雨野〇太かよ！　（）が付いてる所は聞いても聞かなかったことにしておけよ！　ってか、この作者は『ゲーマ〇ズ‼』好きすぎだろ」

（うちの作者は基本的に内容重めのファンタジーもしくはＳＦしか読まないから、こういうコメディー系なやつは読むことも書くことも少ないんだよね。だから、その環境下だとそういう作品で唯一読んでる『ゲーマーズ〇』を参考に書くしかないっていう。っていうか、この一連の台詞、カッコが多すぎない？）

　正邪さんが小声で言った一言を『妖怪ウォ〇チ』ではなく『ゲーマーズ〇』の方の雨〇景太さんの様に聞き漏らさず、わたしは正邪さんに『月の羽衣』について尋ねる。すると、正邪さんがメタい視点でツッコんできたので、わたしは心の中で作者の気持ちを

代弁する。

というか、わたしが正邪さんの呟きを聞き洩らさなかったのを○野景太さんに例えるなら、正邪さんのハイテンションなツッコミはまるで○原佑さんに見える。

「まぁ、話を戻すとな。私たちは無事に月に行けるから安心しろ。根拠は……えーっと、ロケットが出発してから五日経った時に私たちはロケットから切り離されたけど、その時はまだ外が青かっただろ。つまり地球の中にいたんだ。それが今は無事に宇宙空間に放り出されてるんだ。つまり私たちは……」

正邪さんは一度言葉を止めて、にやりと笑う。まるでここにいない誰かを見下すように、天邪鬼というのに相応しい表情で高らかに宣言する。

「上に落ちてるんだ。きっと、紅魔館の連中とか竹林の月人の術を利用できたんだろ！力のある奴らを利用してやったぜ、ざま～みろ！」

「そーなのかー」

少しも信用できない根拠を述べて、正邪さんは歯の端を輝かせた実に綺麗でねじくれた笑顔を見せ、闇がそれに相槌を打つ。

『きっと』の部分で希望的な観測であることがよく分かる。結局、今の状態がどのくらい危険なのかを正しく理解しているのはわたしだけなのだ。いや、もしかしたらわたし自身でさえ、事の重大性を理解していないのかもしれない。

「（はぁ、幻想郷に帰りたい）」

わたしの呟きは限りない宇宙に吸い込まれて、誰にも届くことはなかった。